

京都の看板とホスピタリティ : 看板をめぐる町並み美化への一考察

著者	池田 聖子
著者所属(日)	平安女学院大学国際観光学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	11
ページ	35-45
発行年	2011-06-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001290/

京都の看板とホスピタリティ

— 看板をめぐる町並み美化への一考察 —

池田 聖子

はじめに

昨年度、筆者は「魯山人とホスピタリティ」についての考察を試みた。その後、彼の「生活の美」という考え方が本人独特のものであるのか、はたまた日本文化の普遍的な特徴といえるのかという疑問を抱き続けてきた。

日本文化における美の伝統は、仏教伝来に伴い仏教美術を中心として発展を遂げてきたが、室町に入り仏像仏具から水墨山水画に比重が移行し、茶道、華道などとともに広がっていく。これらは禅宗文化の中から生れてきたのであるが、宗教や政治的絶対権力者の為の文化ではなく、客をもてなす文化として確立されていくのである。日本では権力誇示のための美術品は安土桃山文化（織豊文化）の絢爛豪華な障壁画などにその傾向が見られるが、室町・江戸を通じて全体としてはむしろおもてなしの美術・芸術の傾向が大になっていったのではないだろうか。華道、茶道、香道などはお客を迎えもてなすものとなり、日本を代表する文化となって今に至っている。絵画の世界においても、將軍家の御用絵師であった狩野派は絵画の流れの中の一部に過ぎず、町衆によって支えられた宗達・光琳派の絵画や様々な階層による文人画、世界的に評価の高い浮世絵など、人に観て楽しんでもらうという美術が開き圧倒したのである。江戸時代の工芸も蒔絵や陶芸は人々を楽しませ、生活を美しくするという観点から制作されているものが多い。嘗ての工芸の主たる用途であった荘厳さを演出するための仏具や祭器から目的の転換が起きたのである。明治以降も絵画・工芸などが生活の美としていかにおもてなしの文化の一部を担ってきたかを考えると、魯山人の「生活の美」も決して彼ひとりの天賦の才から生まれたものではなく、脈々と続く日本文化における美術・芸術の系譜を踏襲しているのではないと思われる。

魯山人は書に始まり、刻字看板、陶芸、絵画、漆芸と数多くのジャンルの作品を残しているが、その中に今でも実物を見ることが出来る柚味噌の看板が、姉小路東洞院の八百三にある。魯山人の展覧会を数多くプロデュースしてきた方によると、この「柚味噌」は彼の生涯最高の傑作といえる作品だそうだ。京の町家の商店にふさわしい堂々とした看板は確かに美しさと力強さを秘めており、道行く人を楽しませてくれる。姉小路通りには八百三の並びに亀屋末広の立派な看板もあり、寺町通り同様、秀逸な看板が数多く掲げられている。看板が町並みに美しさと品格を与えているのである。筆者は京都の町並みを歩くたびに看板が気になり、その来歴などを調査してきた。名筆家・学者・僧侶など多岐にわたる分野の先達による書は、町の美しさに溶け込み、あたかも町中が看板美術館となっているようである。商店はその商品やサービスがおもてなしの基をなすものであるが、先ず入り口に掲げられた看板によって、来店する人ばかりでなく通りすがりの人の目をも楽しませてくれる。看板芸術は、高度に洗練された京都のホスピタリティの象徴といえるものではないだろうか。この小論では、「生活の美」を体現する京都の看板をホスピタリティの観点から検証し、その過去と将来への展望を述べてみたいと思う。

看板文化の歴史

社会の発展のなかで原初的な都市が形成されていき交換経済がおこり、定期的に市が立ち、恒常的な商店が形成されていく。その中で、店の商品を分かってもらうための目印が必要とされ、実物を店先にぶら下げたりしたのが看板の始まりである。西川潔によると現存する最古の看板はポンペイの遺跡から出土した酒屋の看板「奴隷が壺を運んでいるレリーフ上の看板」と宿屋と思われる「チェス盤」を表した看板¹⁾とのことである。

日本においては、岩井宏實によると万葉集の歌の中に平城京の西の市を詠んだ「西の市にただ独り出でて眼並べず買いてし絹の商（あき）じこりかも」があり、美しく飾られた絹が看板の役割を果たしていたと想像されている。市には販売商品の実物を肆標（いちくろのしるし）として実物看板が表示されていたようである²⁾。また833年完成の『令義解』関市令市每肆立標条には「凡市每肆立標題行名。〈謂。肆者。市中陳物処也。題行名者。仮如。題標牒云。絹肆布肆之類也。〉」³⁾とあり文献上の看板の初出となっている。市ではそれぞれの店で何を商っているかを示すために品名を書き出したものを立たせていたのである。しかし、その当時、役人以外はほとんど文字が読めなかったと推測され、市に来る一般庶民・購買者に対する目印とはいえず、営業許可証のようなものであったと推測される。後世江戸初期の屏風絵に登場する看板にも文字看板は登場せず、江戸後期から明治にかけ文字看板が多く見られることになった。

平安から室町時代にかけ流通経済が次第に発展し、市が恒常化し「棚に品物を置いて、人に見せ購買意欲をそそる。これを見世、あるいは棚と呼び、あわせて見世棚になる。見世棚という呼び名が定着するのは、平安末期から、室町初期のことのようである。この見世と棚という呼び方が、店（みせ）あるいは店（たな）という呼び名のもとになったようである。（絵巻物などにより）この頃には文様を染め抜いた暖簾が、看板に先んじてもちいられていたことがわかる。」⁴⁾また『一休ばなし』には酒屋の店先に看板として杉の酒林があったと記されている。

『京都星光寺縁起』（1487）に筆売りと茶屋の看板がかかれており最古の絵看板の資料とされている。更に洛中洛外図や都鄙図鑑にも暖簾や絵看板・文字看板が登場してきており、江戸期になり京都の町の隆盛がうかがわれる。しかし幕府が江戸に開府され、商工業が江戸を中心に発展するようになり、看板文化も江戸を中心により大型化し、より華美になり、1682年以降幕府が、看板は木地に墨書、金具は銅製に限るとの禁令を出したほどであった。江戸時代は看板文化が最も隆盛を極め、多くの種類の看板が制作された。屋外用には軒看板・掛看板（取り外してしまえる看板。閉店の意味の「看板」という言葉のもと。）・立看板、屋根看板。屋内用には、衝立看板、壁掛け看板、飾り看板、置き看板などが作られた。

江戸期の看板屋は本来「御額師」という寺社の扁額を彫る職種の人々であった。扁額は本来中国に派生するものである。古代中国の宮殿や廟祠の門の上部に名前を記した木札をかけ、これを扁または額とよび、仏教寺院でも号や寺名を書いた額が掲げられ、皇帝や名僧による揮毫がもちいられている。日本でも仏教文化の伝来と共に揮毫額の慣習がもたらされ、奈良時代にはすでに天皇や高僧の手による揮毫額が寺院や神社の本殿や鳥居にも掲げられるようになっていた。また中国宮廷文化の伝来の中で宮殿や貴族の邸宅などにも額が架けられるようになった。

平安時代の大内裏にも額が掲げられていたが消失してしまい、今は文献でしか知ることができないが、藤原伊行（?～1172）による『夜鶴庭訓抄』巻末に次のような記載⁵⁾がある。

「内裏額の書きたる人々

十二門額

南	美福門	朱雀門	皇嘉門	弘法大師
西	談天門	藻壁門	殷富門	小野美材

北 安嘉門 偉鑑門 達智門 橘逸勢
東 陽明門 待賢門 郁芳門 嵯峨天皇

また内の額書人々

道風 内蔵頭、佐里 左大弁、行成 大納言、定頼 中納言、兼行 大和守
弘経 小納言、源左府 俊房、入道殿下

皆有勸賞」

江戸時代になって三筆・三蹟という表現が使われるようになったが、既に平安京においてその門の額が日本を代表する名筆家によって書かれたものであることは注目に値するであろう。資料が残っておらず検証できないが、大唐の都長安の門もまた、欧陽詢や太宗などの書によって揮毫されたものであろうかなどと思いを馳せてしまう。そしてまた、書家という概念が無い中世ヨーロッパの都市の城門は、一体どのような装飾が施されていたのであろうか。

江戸後期以降、商家でも看板屋の書になる看板に加え、文人や書家に揮毫を頼み看板と為す風習が生れてきた。鳩居堂には池大雅による看板が残っている。書を芸術として評価する風習が古来よりあったことは、東洋的な芸術観であり、西欧にはない観念である。今京都に残っている看板に富岡鉄斎の書が数多くあるのもそのためであろう⁶⁾。

東西の看板文化の比較－西洋では文字は記号、東洋では文字は芸術

ここで、西洋の看板と東洋の看板を素材とデザインにおいて比較してみよう。素材においては、日本は圧倒的に木製看板に墨か彩色、篆刻に金彩が多く、西洋では鉄製の棒を張り出し、金属製の鍛金、鍍金などによる金属看板がほとんどである。日本の文化は木や紙など有機的素材を好む傾向にあり、大陸から金属や石の文化が請来された後も素材的には有機素材が用いられてきた。たとえば、仏像は大陸では金銅仏や石仏が多いが、日本では平安時代以降木彫が主流となっていく。唐では盛んに作られた金器や銀器が正倉院にも多く残されているが、平安時代には仏具以外は、貴族の文化の中ではほとんど作られず、金の美しさを残しながら漆という有機的素材に溶け込ませた蒔絵が取って替わるのである。石作りの家・建物には金属の看板、木の家・建物には木の看板。なじみの素材を使い製作していることは当然のことと思われる。

図像的には西洋では、多くの絵画パターンがあり、太陽・月星、人物、動物、植物、魚、など幅広く画かれている。宿泊・飲食店を兼ねたインやレストランなどの看板が多くの人を惹きつけが為に魅力を競っていた。日本では旅籠の看板は日暮れに目立つように行燈看板で文字看板のものが多く、比較的小となしい表現になっている。絵画的表現では生活用具や文具の実物を模型化した看板が多く、西洋のように物語や神話にもとづいたモチーフは無い。

江戸時代から読み書きの教育が大衆化され文字が文化として普及してきた日本は、西洋と比較して識字率の高さを誇っていた。そして文字文化の普及と共に書の実美を追求める機運が起こってきたのである。西洋においては文字の実美はタイポグラフィというデザイン的美であるが、東洋において書は技巧的美ではなく人間美とまで云われ、芸術までに高められているのである。2010年11月サザビーズのオークションで、リンカーン署名の奴隷解放宣言書が約3億円で落札されたが、それは書としての価値ではなく、政治的・博物的価値によるものである。しかし、中国の顔真卿の書や藤原佐理の書は博物的価値より芸術的価値によって高額な価格が維持されているのである。事実2010年4月のオークションで黄庭賢の「砥柱銘卷」が59億円で落札されている。

ここで、西洋文明の影響を受けた小山正太郎の「書は美術ならず」と岡倉天心によるその反論の論争を振り返ってみよう。日本の看板が書を如何に大切にしてきたか、また今後大切にしていかなけれ

ばならないかを知る上で貴重な資料となろう。

明治14年の第二回内国勸業博覧会で書が優遇されたことに対し、洋画家で当時東京師範学校教諭であった小山正太郎は、翌年『東洋学藝雑誌』に「書は美術ならず」を発表した。彼は、書は言語の符号に過ぎず意味が通じればよく、それ以外に美的価値は無いと言い切っている。書に感動するということは書かれた語句に感動するに過ぎないとし、西洋において文字は美術でないのだから東洋にても然りとした⁷⁾。これに対し岡倉天心は東洋には東洋の美術観があり、書は芸術足りえると主張している⁸⁾。

この二人の立場の違いを理解するには、まず西洋はアルファベットをはじめとして表音文字であり、東洋の漢字は表意文字・象形文字であるということを念頭に置かねばならない。西洋の文字自体には意味が無く言葉・言語に意味があり、東洋では文字自体に意味があり象形文字とは絵画を簡略化したもののものだ。書家の石川九楊は次のように東西の文字文化の比較を述べている。

「漢字文化圏では、書くという表現は文化の中枢に位置する。(略)他方、西欧においては、文字は、言葉の中枢に位置するというよりも、どちらかと言えば外在的だから、(略)書字を外部のものと考え、外部に文字を飾り立てるカリグラフィのような装飾文字が発達したのである。(略)言葉の中枢に文字が居坐り、『文字を話し』『文字を聞く』言語、中国語や朝鮮語、日本語においては、書の表現は避けられない宿命として、文化の中枢に位置してきた。当然西欧とて同じ構造を持つのだが、アルファベットがどちらかと言えば、発音記号に近い役割を果たすために、『文字を話し』『文字を聞く』よりも『声を書き』『声を読む』型の言葉として訓練されつづけ、筆触による文字の文化以上に声帯と空気との摩擦、触覚に発する声の文化を鍛えたのである。

書とカリグラフィの違いは、言葉(文字)にウエイトのかかった日本の演歌と、声にウエイトのかかった西欧の朗唱、日本の文字つまり形や型にウエイトのかかった能や歌舞伎と、声にウエイトのかかったオペラ、短冊に俳句を書きつける句会と、西欧の詩の朗読会などの様々な文化の違いをもたらしていると言ってよいだろう。』⁹⁾

このことの思想的根拠を検証してみよう。西洋は新約聖書ヨハネ伝第一章に「初めに言葉ありき。言葉は神と共にあった。言葉は神であった。」とあり、言語の絶対性が述べられている。これに対し福永光司は「中国の書芸術思想の根底には、自然の思想―人間存在の根源を天地大自然の理法の中に凝視し、人間と自然との一体性、同一性を考える思惟―があるといえるであろう。」¹⁰⁾と述べ、道教・老荘思想の天地造化の理法にかかわりを持ち、筆墨に託していく全人格的行為として書をとらえているのである。仏教、儒教、道教の東洋思想の中でも、芸術論に多くの影響を与えている道教・老荘思想の文字・書に対するこの考え方は、東洋の文字・書がいかに芸術性を持ちえたかの思想的根拠となりうるであろう。これは西洋と東洋の宗教観の違いが書を美術として認めるか否かについての決定的な要因となっているのである。書道・茶道・華道・柔道・修験道など本来は技や術や法といったものを、道と呼んだ根拠は莊子の「道は技より進めり」(技を根底から支え、業をわざとして生かすのは道である『莊子・養生主篇』)という技能の哲学によると、福永光司は述べている¹¹⁾。

日本の歴史の中で多くの書芸術を生み出してきた弘法大師ら三筆・三蹟の書や良寛の書は、多くの人の心に美的感動を呼ぶものである。この書芸術の持つ美しさで看板を制作できるならばそれこそ最高のおもてなしの第一歩といえるのではないだろうか。自分の権力誇示のためではなく、店に来るお客を素晴らしい書看板でもてなすということは、ホスピタリティ精神の表出以外の何ものでもないと言えるであろう。

京都の看板

街が看板の美しさを創り、看板が街の美しさを創る

都市の繁栄と商業の発展によって、町並みは変わってくる。看板文化も江戸時代に広まり明治、大正、昭和と時代と共に変化してきた。東京では震災や戦災によって街が崩壊するたびに町並みが新しくなり看板も変わってきた。大正時代に魯山人の大きな看板を掲げた店はなくなり、看板そのものも失われた。また建物がどんどん近代化され建て直され、建物から外されてしまった看板もある。岡本太郎の祖父岡本可亭の『山本山』の看板がその例である。また車社会が看板を大きく変え、看板の大型化を生み出した。速く走る車からでは小さな看板は目立たず、文字も読めない。そこでビルの上に大きな看板を立てたり、宣伝効果をあげようと看板を電飾化することによってより派手なものとなっていった。こうして古きよき看板は骨董や民芸愛好家の蒐集の的となってしまったのである。

京都の逸品看板（美術的価値のある看板）

前述したように、筆者は看板との出会いを求めて京都の街を歩くのが好きである。そして、今日まだ鑑賞に値する美術的価値のある看板のデータベースを作成することができたと考えている。今回紹介する看板は、誰もが知っているような著名なものばかりであるが、各商店のホームページなどを参考にしながらある程度まとめ、それぞれ現地に赴き関係者から直接聞き取りした情報をもとに編集したものである。

京都の看板—代表例解説

(1) 八百三

住所：中京区姉小路東洞院西入る。

題名：柚味噌（八百三で販売している商品の名）

所有者：八百三 創業 1708 年

創業から大正時代までは、御所や知恩院などの社寺への精進料理の仕出しを専業としていた。初代の考案による柚味噌は精進料理の調味料として評判になり、その製造販売のみとなった。

看板制作年：大正3年

書家・制作者：北大路魯山人（1883～1959）

京都上賀茂神社の社家に生れる。書家・篆刻家として出発するが星岡茶寮で料理人として腕を振るい食器の製作から陶芸家となり、その後、絵画や漆芸など多方面に才能を発揮した。「持ち味を生かせ」「自然美を大切に」がモットーであり、書は王羲之や顔真卿、春屋宗園や良寛を好んだ。

特徴：魯山人の刻書看板の秀眉の作。明治末に魯山人は朝鮮や中国に渡り多くの書の研鑽を積んだ。王羲之や顔真卿の影響が大きいなかでこの看板は、黄庭堅の影響がうかがわれる。他



の人の看板と違い魯山人は自分で刻字している

依頼：内貴清兵衛の紹介かと思われる。または、近所であった実家の福田家の紹介か？

特記：表の看板は魯山人誕生 100 周年の展覧会に借りるため吉田耕三が作らせた模刻。本物は中にある。

(2) 井筒八橋

住所：東山区川端通四条上る。井筒八ツ橋本舗祇園本店

題名：井筒八ツ橋本舗（店名）

所有者：株式会社井筒八ツ橋本舗 創業 1805 年

初代津田佐兵衛が考案した固焼き煎餅を、琴形であったことから箏曲八橋流の創業者八橋検校にちなむ「井筒八ツ橋」と名づけた。その後、生八橋の「夕子」など数々の銘菓をうみ京都の代表的菓子店となった。

看板制作年：1955

書家：徳富蘇峰（1863～1957）本名：猪一郎

熊本県水俣に生れる。同志社英学校中退。国民新聞社社主を経て、貴族院議員。オピニオンリーダーとして活躍する。終戦後 A 級戦犯容疑を受けたが不起訴となり公職を追放された。「近世日本国民史」は全 100 巻の大著。歴史家・評論家。文化勲章を受章（1943）したが 46 年に返上。弟は文学者の徳富蘆花。

特徴：晩年文人画を書いたりしていた蘇峰 92 歳の作品。大きく力強く気骨ある蘇峰の性格が表れている優れた書である。蘇峰の最初で最後の看板となる。

依頼：株式会社井筒八ツ橋本舗現名誉会長・津田佐兵衛の父親の代に『中外日報』を創刊した真溪涙骨の紹介で 1952 年に依頼。依頼主の先代は完成した看板をみることなしに二年後に亡くなっている。



(3) 春芳堂

住所：中京区姉小路烏丸東入る

題名：春芳堂（店名）

所有者：株式会社 春芳堂 創業 1856 年

初代丹波屋嘉兵衛は画家中島来章の勧めで表具師となる。「表具は脇役」「書画より表に出てはいけない」が代々の教えで、京表具を代表する表具屋。

看板制作年：

書家：竹内栖鳳（1864～1942）

京都市に生まれる。京都府画学校卒業。京都画壇を代表する日本画

家。東の大観に対し西の栖鳳と称された。第一回文化勲章授章。門下生に、上村松園・土田麦僊・橋本関雪など京都を代表する作家を輩出した。

特徴：京都画壇のトップである竹内栖鳳の書看板は他に類をみない。10 年前ほどに塗り替えて、

元来の上品な朱の色合いを再現させ、何とも言えない風情を醸し出している。

依頼：栖鳳が春芳堂当代の祖父を気に入っており、好んで表具を発注していた。この看板は元々は栖鳳が表札用に縦書きで小さく「春芳堂」と書いたものを画伯の許可を得て、寺町にあった宮崎という看板屋さんに相談し横書き仕立てにし、今のサイズにしたものである。



(4) 鳩居堂

住所：中京区寺町姉小路上る

①題名：薬種（業種名）

所有者：株式会社京都鳩居堂 創業 1663 年

熊谷直実 20 代の子孫を名乗る熊谷直心が薬種商として創業。その後、中国輸入の筆や紙など文房具を扱うようになった。屋号は室鳩巢の命名。池大雅、頼山陽などの文人らの協力により独自の文房具を開発。

看板制作年：調査中

書家：池大雅（1723～1776）

江戸文人画の確立者・書家。京都銀座の役人の子として生れる。少年期より苦勞し唐様の書を学び賞される。柳沢棋園に文人画を学び多くの作品を残す。中国南宗画法に日本の画法や西洋画法を加味し独自の画風を確立した。与謝蕪村との合作十便十宜帖は国宝。

特徴：池大雅が創業当初の薬種を書いた書を屏風仕立てにして保存されている。堂々とした中にも温かみのある書

依頼：調査中

②題名：鳩居

看板制作年：調査中

書家：頼山陽（1780～1832）

大阪に生れ、広島、江戸と転じた後京都に住む。「日本外史」を著す。歴史家、陽明学者、文人画家として多彩な才能を発揮した。山紫水明荘にて多くの文人墨客と交流した。書も評価が高い

特徴：戦前は書家の代表とされたくらいの名筆家による書。

依頼：調査中

③題名：鳩居堂（現在の看板）

看板制作年：

書家：羅振玉（1866～1940）

清国に生まれ、辛亥革命以降日本に亡命。甲骨文字・敦煌学の研究家。明清の行政文書の

保存で活躍。日本に多くの拓本などをもたらし、京都国立博物館の書のコレクションの基礎となる。満州国参議を経て旅順にて没す。

特徴：中国の書家らしい書体。楷書体の切れのある字。

依頼：調査中



(5) 彙文堂

住所：丸太町河原町西入る（地上げで 50 メートル東に移転）

題名：彙文堂書莊

所有者：彙文堂 創業 1907 年

創業者が東京の中国書専門店で奉公の後独立・開業。内藤湖南の他に、富岡鉄斎・森鷗外・西園寺公望らに愛された。中国書籍の専門店。

制作年：

書家：内藤湖南（1866～1934）

秋田県鹿角市生まれ。秋田師範学校卒業。大阪朝日新聞の編集を経て、京都帝国大学に勤める。京都支那学の創始者、京大の学宝とまで言われた。実証主義の内藤として名を馳せ、東大の白鳥倉吉の邪馬台国九州説に対し畿内説を論じた。定年退官後は読書三昧の日々をすごした。

特徴：京都の文化人を代表する実直な書。珍しい看板である。

依頼：調査中



(6) 亀屋陸奥

住所：下京区西中筋通七条上る

題名：本派本山 松風調進所

所有者：株式会社 亀屋陸奥 創業 1421 年

山科に本願寺が出来た頃から仕え、特に織田の石山本願寺攻めでは 11 年に渡り本願寺を応援し続けた。1591 年に本願寺が移ると共に御用達の菓子司として現在の地にて開業。

制作年：大正か昭和

書家：小田か川田尊順（西本願寺の教務部長か指導部長）

特徴：西本願寺周辺では本願寺の要職にある人の書による看板が有る。

特に本願寺出入り方の店はほとんどがそうである。

依頼：調査中



(7) 平安殿

住所：東山区神宮道三条上る

題名：平安殿

所有者：株式会社 創業 1951 年

制作年：1952 年

書家：富本憲吉（1983～1959）

陶芸家、人間国宝の第一号。色絵磁器で認定。文化勲章受章。陶芸界の頂点を極めた。東京時代・九谷時代を経て昭和 24 年前後京都に移住。東山の鈴木窯（現鈴木爽司窯）などにて制作。京都美術学校の教授、学長を歴任。書においても味のある書であった。

特徴：京都のお菓子屋の中では戦後の創業という歴史の浅いほうであるが、その当時の一流芸術家であった富本憲吉に依頼し製作された戦後を代表する京都の看板となっている。

依頼：創業者の縁戚であり、富本憲吉の助手をしていた岩渕重哉を通じて小川金三（創業者）が依頼。包み紙は人間国宝稲垣念次郎の絵。



おわりに

戦災にあわず町並みが保存されてきた京都では、多くの看板が今も現役で活躍している。寺の揮毫額、神社の額、商店の看板を調査していくことによって、先ず京都の観光資源の掘り起こしにつながる大きなテーマとなりうる事が分かってきた。現在、京都には看板の色などを規制している景観保護条例があり、屋上看板の禁止、色彩の使用の制限が厳しく、マクドナルドや銀行の看板が他地域と

異なるよう制作されている。しかし、単に景観を壊す看板の規制をするだけでなく、京都の看板の文化遺産を検証しその良さを次代に伝え、新たな町にあった美しい看板芸術・文化を作っていくの方が大事なことはないのだろうか。

看板見学ルートマップ等を作成し、観光に活かしていくことも出来るのである。大学での授業の一環として、学生たちも調査に参加させることにより町との繋がり、商店との繋がりが観光学科の学生としての意識づけの一助になると確信している。今回、本小論をまとめるにあたり京都を代表する看板をいくつか例にとり上げたが、これらは文献等でもたびたび取り上げられることが多く、今更新たに紹介する必要があるか迷った。しかし、看板というテーマを掘り下げていくには、やはり京都の看板の素晴らしさを再確認することから始めるのが順当と思いあえて掲載したものである。今後の調査研究の後に、これからの新しい町並みにふさわしい美的な看板は何かという提案を行っていききたい。たとえばさんと君で脚光を浴びた簀内佐斗司に、ある地区の通りの看板をコーディネートしてもらい簀内看板通りにしたり、民芸をアートたらしめる活動をしている陶芸家の近藤高弘や染織家の志村ふくみらにある地区を任せたりすることにより、平成の特徴ある看板を活かした街づくりをしていくのも面白い試みであろう。その積み重ねの集大成として、看板による町並みの美化キャンペーンを行っていくのはどうだろうか。景観保護条例のように規制ばかりの後ろ向きの街造りではなく、もっと建設的な美の創造としての看板文化が提案できたらと念じている。

謝 辞

今回の調査に当たり、看板の由来やその制作者とのいきさつなど興味深いお話を聞かせていただいた、各店の代表者の方々に厚く御礼申し上げます。特に春芳堂の伏原様、八百三の中村様、平安殿の小川様、井筒の関係者の皆様には貴重なお時間を割いていただいたこと、文末ではありますが改めて感謝の意を表す次第です。

註

- 1) 西川潔『ヨーロッパ伝統の看板』（1981）、ダヴィッド社、pp.1-11
- 2) 岩井宏實『ものと人間の文化史 136「看板」』（2006）、法政大学出版局、pp.5-6
- 3) 『新訂増補国史大系・令義解』（1981）、吉川弘文館、p.199
- 4) 高村五郎『時代を映す 看板』（2007）、里文出版、p.103
- 5) 魚住和晃『「書」と漢字』（1994）、講談社選書メチエ
- 6) 富岡鉄斎（1832～1924）：三条通新町東の法衣屋の次男として生れる。石門心学・漢学・陽明学を究め、絵画も大和絵・文人画・明清画・大津絵など多岐に渡る影響を受けた。董其昌の「万巻の書を読み万里の道を往く」の言葉を実践し、数多くの作品を残した。80代以降の作品は特に評価が高く、世界でもレンブラントと並び称されることもある。
- 7) 小山正太郎「書は美術にあらず」、『東洋学藝雑誌』第11号～15号（1882）
- 8) 岡倉天心「『書は美術ならず』の論を読む」、『東洋学藝雑誌』第11、12、15号
- 9) 石川九楊『書とはどういう芸術か』（2004）、中公新書、pp.138-140
- 10) 福永光司『中国の哲学・宗教・芸術』（1988）、人文書院、p.174
- 11) 福永光司『道教と日本文化』（1982）、人文書院、p.249

参考文献

- 川喜田煉七郎『世界の看板』（1967）、造形社
秦恒平編『古美術読本（2）「書蹟」』（2006）、光文社知恵の森文庫

福永光司『中国文明選 14「芸術論集」』（1971）、朝日新聞社
福永光司『莊子（外篇・雜篇）』（1967）、朝日新聞社
福永光司『老子』（1968）、朝日新聞社
福永光司『道教と古代日本』（1987）、人文書院
松村茂樹『「書」を考える』（2010）、二玄社
山田 和『魯山人の書』（2010）、平凡社
吉岡幸雄『京都の意匠 2』（1997）、建築資料研究社
『旧約聖書』
『日本美術全集 15「永徳と障壁画」』（1992）、講談社
『日本美術全集 17「狩野派と風俗画」』（1992）、講談社
『「道教の美術展」カタログ』（2009）、大阪市立美術館

Hospitality and Kanbans (signboards) in Kyoto — A Thought on Beautification of City Streets Utilizing Kanbans —

Seiko IKEDA

Kyoto has many historically significant Kanbans (signboards) that not only represent the spirit of hospitality of the city but also hold high artistic values. Through the research on Kanbans, this author wishes to explore the ways to utilize them in the city's tourism and suggest future of Kanbans to beautify the city streets.